「 草の花」 参考資料一覧　　＊要旨、引用は資料作成者の主観によるものです。　　第181回 福永武彦研究会 2020.3.29 配布資料　　木澤

文献を大別すると、概ね以下のカテゴリーに集約すると思われる。
①福永の同性愛・療養所体験、「かにかくに」「慰霊歌」の系譜
②孤独、愛の不可能性について
③キリスト教、とくに無教会主義との関連
④他作家による作品との関連（夏目漱石「こゝろ」他、川端康成、森鴎外、田山花袋、志賀直哉、ジイド「狭き門」、J.グリーン）
⑤福永自身の作品「ある青春」「風土」「独身者」「夢の輪」他との関連

1. 福永自身による言及・福永作品からの引用など

No.	タイトル	著者	書名（出版社）	初出年	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
0	「草の花」初出と書誌	―	福永武彦全集　第2巻　附録他より（新潮社）	―	1	・初出：　書き下ろし ・単行 1.「草の花」初版。1954年4月新潮社刊。四六判、クロース装、カバーつき。装幀：江崎孝坪。本文270頁。内容：「草の花」1篇。 2.「草の花」新潮文庫版。1956年3月刊。本文255頁。内容：「草の花」1篇、及び「解説」（本多顕彰）。 3.「草の花」新潮文庫第18刷改版。1967年12月刊。本文257頁。2.を新仮名遣いに改めたもの、他は同じ。カバー装画：朝井閑右衛門。 4.「草の花」新版（決定版）。1972年3月新潮社刊。四六判、クロース装、函入り。装幀と題字：岡鹿之助。本文302頁、内容：「草の花」1篇、及び「草の花」遠望（著者）。 5.「草の花」私家版。1972年4月刊。限定10部、番号入。四六版、装皮装、布装函入。扉著者毛筆書き。内容は4.と同じ。 6.「草の花」初刊版、決定版。　福永武彦 電子全集1　2018年8月小学館配信。「かにかくに」、「慰霊歌」を合わせて収録。
0	「かにかくに」「慰霊歌」初出と書誌	―	福永武彦 電子全集1	―	―	「かにかくに」 ・第一高等学校「校友會雑誌」第三百五十五号（1936年6月）に本名で発表された。 時に福永武彦18歳、第一高等学校三年。 「慰霊歌」 ・1947年10月に北海道帯広市から上京し、11月に東京都北多摩郡 清瀬村の東京療養所に入所して以後、胸郭成形手術を繰り返す厳しい生活を送りながらも、1949 年12月10日から1950年5月10日にかけて、療養所のベッドの上で横向きに寝 たままで執筆された。
1	失われた青春	福永武彦	「北国新聞」 1954年3月29日朝刊 随筆集「遠くのこだま」所収	1954	3	（引用） 　僕の今度書いた長篇「草の花」も、一つの失われた青春の物語だが、書いている間、僕はその青春を生きていた。僕は自分の青春をも、また架空の青春をも、それをもう一度生きようとは思わないが、振り返って、それが失われたとも思わない。魂が成長する時に、それは外界からの如何なる圧迫にも拘らず、成長するのである。 　僕はサナトリウムに7年ばかりいて、その間に、多くの年少の友人たちが病気に苦しむのを見た。病気の過酷さや、経済的な悪条件や、愛情の頼みがたさによって、彼らは失われた青春を生きていた。他人の空しい言葉など何にもならないところで、彼らは自分の青春を孤独なままに築いて行くほかはなかった。しかしそれもまた青春なのだ。希望の多い華やかな日々を送っている青年たちと較べて、これらの不幸な歪められた青春もやはり生きるに値するものだ。彼らが生き残って過去を振り返った時に、たとえ失われた青春でもそこに一人一人に固有の意味があったと、彼らは気がつくだろう。そして人生とは、常に何ものかを失いつつ生きて行くことだと知るだろう。

3	友情の中の愛	福永武彦	「法政」 1956年1月号 随筆集「遠くのこだま」所収	1955	4	（引用） 　友情というものは、恋愛とは対照的なものと考えられているし、また恋愛へ移行する前提的な精神作用とも考えられている。つまり、同性の間に感じられる愛—同性愛という意味ではない—と異性の間に感じられる愛とを、二つの別個のものとして見るか、或いは前者を後者へ至る一つの道程として見るかである。しかしその何れの場合にも、そこには愛があり、愛の本質には変わりがないだろう。 　僕は「草の花」という小説を書いて、その中にこの二つの現象を併置したが、その何れも、内に潜む純粋な愛を抽出してみようと思ったからである。あの小説の中で、同性に対する愛が異性に対するそれよりも、鋭くかつ豊穣に描かれているからといって、僕が友情を恋愛よりも特に重んじているわけではない。僕の書いた友情は特殊のケースだし、それはあらゆる場合に当てはまるとは限らない。 　しかし僕は今でも、十代の終りごろに人の経験する友情、殆ど異性への愛と同じ情熱と苦悩とが、プラトニックであるだけに一層純粋な観念として体験される友情に、深い意義を覚えている。愛というものはすべてエゴの働きだが、このような友情は無償の行為というに等しい。この殆ど無意味とも思われる愛、相手が同性であるだけに一種の疚（やま）しさと心苦しさとを感じ、その愛の充足がどのようになされるのか、それさえも定かではないような愛の中で、人は自分の魂の位置を測定する。つまり愛するということは自分の魂を見詰めることであり、それは異性への愛の場合と少しも変らない。
4	中村真一郎との対談	福永武彦	「現代日本の文学月報」37 1971年4月 対談集「小説の愉しみ」所収	1971	14	（引用） 中村　君が「草の花」を書いたのは、いつだっけ。 福永　サナトリウムを出た年に書いた。夏休みから書き始めたから、卒業論文みたいなものだな。書いていてどうもうまくいかないから、初めと終りにわくを作ることにしてね。君はやはり油屋で「夜半楽」を書いてたろ。 中村　ということは、つまり堀さんがなくなった年だな。 福永　堀さんの全集の計画があって、それでひと夏油屋にいたから、そこで書きはじめて、ちょうどその年のクリスマスごろに書き上げたんだ。僕の小説の中では、あれは例外的に自伝的だな。 中村　全然知らないや、あの中に書かれていること。きみに関しては、ぼくの知らない非常に大きな部分があって、そしてある部分で、きみと親しくつきあっていた、という気がするね。 福永　事件は、みんなウソさ。和船なんか漕げないし、泳ぎもできないしね。だけど、人だけは使った。高等学校の弓術部の写真があれば、この人がこのモデルというように、だいたい、言えるよ。まあ、二人合わせて一人にしたものもあるけど。 　けっきょく、ゲーテじゃないけれども、小説っていうのは、二十歳ぐらいまでに考えたことを、だんだんに刈り取っていくことじゃなかろうか。そういう意味じゃ、青春というか、もっと幼年時代までさかのぼってもいいが、幼年から青春までの間の一番大事なことが、根だけはずっとあって、まあ途中で立ち枯れるのもあるけど、その根から育ったのを上手に刈り取ったものが作品ということになるんじゃないかね。
5	「草の花」遠望	福永武彦	「草の花」新版（決定版） （新潮社） 1972年3月 福永武彦全集（新潮社）　第2巻に所収	1972	9 （全集）	（要約） ・「草の花」の原型「慰霊歌」の執筆：1949年12月10日から翌年5月10日にかけてだった。療養所の硬いベッドの上に寝たまま原稿を書いた。冗漫な箇所が多く、原稿を「群像」に送ったが採用されなかった。 ・出所後、「草の花」では新しい試みとして「第1の手帳」に「第2の手帳」を置き、藤木忍と千枝子、春の戸田と秋の信濃追分とを対照させるとともに、主人公の魂を照らし出す照明を変化させることで主題をより明らかに浮かび上がらせようとした。また、療養所における苦しい思いを共通のものとして汐見茂とその同室の患者たちの上に描きたかった。「冬」と「春」の章は単に額縁としてあるだけでなく筆者にとって不可欠だった。 ・「草の花」は筆者の長篇としては例外的に作中人物の原型があることを否めない。個々の場面についてはその多くが虚構により成り立っている。 ・（引用）青春というものは一人一人のエゴイスティックな夢想から成り立っているような気がしないでもない。青春は失われて行くものであり、失われることそれ自体が夢想の特質でもありまた青春の特質でもあると言えるのではないだろうか。この移ろいやすいものの一つの象(かたち)を私なりに定着することが出来たとすれば、もしも読者がそれを認めてくれるならば、作者としてこれほどの名誉はないだろうと思う。

2. 単行本

No.	タイトル	著者	資料	初出年	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	「福永武彦の世界」 第3章　草の花	首藤基澄	審美社 1974年5月	1974	第3章 18	（要点） ・詩集「ある青春」に戦後の視座を持ち込んで追体験したのが「草の花」の世界である。 ・「風土」では男女が結ばれることによって生じた「愛の不可能性」が追求されていたが、「草の花」では純潔を貫くことによって生じた「愛の不可能性」が追求されている。 ・「草の花」は典型的な「失われた青春の物語」であり、青春の感傷がためらいもなく前面に押し出されている。 ・「狭き門」のアリサの役割を汐見に負わせ、ジイドとは異質の思想を、「愛の不可能性」をモチーフにして展開している。 ・福永は「狭き門」のキリスト教的自己犠牲に代わるものとして、「英雄の孤独」を考えたわけだが、「英雄の孤独」もまたキリスト教的自己犠牲同様、「真の愛を生み出す」ものではなかった。 ・汐見は戦時下のキリスト教や軍国主義にプロテストしており、「草の花」は消極的ではあるが抵抗文学と呼んでいい内容を獲得している。 ・「草の花」は「病者の心」という極限状況を生きねばならなかった福永の内面の一つの反照であり、「英雄の孤独」とは引き裂かれた生のうめきにほかならなかった。
2	「福永武彦・魂の音楽」 第2部・第3章　愛の不可能性 —「草の花」—	首藤基澄	おうふう 1996年10月	1996	第3章 9	（引用） 藤木が汐見の愛を拒否したのは、汐見があえて語らなかった愛の肉体的な側面を察知したからではなかったか。（中略）　汐見の愛への投企が純粋性を保つためには、藤木の拒否がぜひとも必要であった。拒否に会って隠微な世界への没入は避けられたのである。危うい橋を渡った汐見の愛は、藤木の敗血症による死によって、ついに不可能な愛の典型となったといえよう。 「第一の手帳」は、孤独者が初めて他者にかかわり飛翔しようとした試みの世界で、孤心のさやぎが明確に定着されている。 「第二の手帳」では孤独の意味を掘り下げ、何ものにも譲らない生の倫理とする。汐見は、幼い頃母親を亡くし、肉親との内的古流を欠いて成長したため、それを逆手にとって、自立の思想の根拠、砦としての孤独の理念を確立していったのである。
3	「草の花」の成立 —福永武彦の履歴	田口耕平	翰林書房	2015		（「福永武彦研究第11号（2015）　西田一豊氏の書評を要約） ・これまで指摘の少なかった5つのプレテキストを丁寧に読み込み、モデルとなった人物への福永の執着をあぶり出していく。公開された北海道文学館に寄託されている昭和17年9月の日付の未発表資料は、モデルの死から4年を経過した福永の当時の「愛」や「孤独」に関する感想がまとめられており、作家研究において重要な資料である。「慰霊歌」には若き日の自身の姿勢を批判する自己相対化が行われているという田口氏の指摘に、この資料は説得力を増させている。 ・「第二の手帳」の分析では、千枝子および彼女の無教会主義への進行について精読を行い、そこから「矢代」の存在をクローズアップし、「第二の手帳」での藤木をめぐる汐見と矢代の対立という隠されたモチーフを浮かび上がらせている。またそれによって「第一の手帳」「第二の手帳」が実際には一つのモチーフによって貫かれていることを指摘している。

3. 出版時評

No.	タイトル	著者	資料	初出年	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	書評 「草の花」「夜半楽」	小林正	日本読書新聞 1954年6月21日	1954		（引用） 妥協のない青年と少女の破局は、理想型（男性）と現実型（女性）とが永遠に合することなくたどる平行線、愛情の乖離の問題を清純な形で提出している。
2	書評 「潮騒」「草の花」「夜半楽」	荒正人	朝日新聞 1954年6月21日	1954		（引用） 往年の″高等学校小説″のような部分とか、気負った芸術家意識を作中にだしているのは気になるが、その反面、香り高い文脈で、あふれる情感のすみずみまでをやわらかに描きつくしているのが、自然の美点である。
3	書評 「草の花」	三島由紀夫	「群像」 1954年7月号	1954		（引用） 青春のはじめに二度の恋に破れたくらいで、数年後の汐見の剛毅な像が形作られるはずもなく、もしそうだとしたら、プロローグの汐見は、とんだ食わせ者にすぎぬ。むしろ汐見の青春の形成の徐々たる過程は、時間的に連続するロマンとして描かれるべきで、こういう回想的手法が適当でなかったともいえよう。 しかしプロローグは重厚精緻であり、第一の手帳のKnabenliebeは極めて美しく描かれている。近代日本文芸で、かほど美しく描かれた「美少年録」を私は知らない。私も一読者として殆んど藤木に恋着したのであった。

4	書評 「潮騒」「草の花」「夜半楽」	桂芳久	「近代文学」 1954年11月号	1954		（引用） 第一主題と第二主題は、不協和音として一つの楽音を作り出すに、あまりに構成上に無理があるようで、結局は藤木兄妹に愛を拒まれて、あえて自殺に等しい成形手術を受けて死に至る汐見の内的必然が希薄となるのである。つまり汐見の二つの手記だけで話者の「私」が、汐見は成形手術による自殺の方法を選んだと、考えるだけの理由が納得されないのである。

4. 文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	「草の花」解説	本多顕彰	新潮文庫 1956年3月	1956	3	（引用） 「草の花」は、日本文学では稀な、知的な青年を描いた小説である。この青年の孤独は、理知から来ているともいえる。理知が彼を潔癖にし、潔癖が妥協を許さない。そのために彼は友を失い、恋人を失ってしまう。
2	「解説」	辻邦生	「新潮日本文学49　福永武彦」 1970年8月	1970	12	（引用） 地上に人間は孤独に生きてゆかなくてはならぬ。それなのになぜ愛することはできないのだろう？　この愛の不可能性の問題は氏の人生行路が深まるにつれて、いっそう複雑で悲劇的な響きをともなうようになるのである。 もともと愛の観念を発達させ、男にとって女が、女にとって男が、人生そのものを覆いつくすものと感じられるようになったのは西洋文明の特質であるという意味のことを、吉田健一氏が書いているが、この意味では、福永氏の作品は、深く日本の現実に根ざしながらも、その資質と姿勢において、きわめて西欧的であると言うことができる。
3	「草の花」の頃	矢内原伊作	福永武彦全小説第2巻月報 1973年11月	1973	3	（引用） ・・・主人公汐見茂樹は若き日の作者自身であり、藤木忍にもその妹千枝子にも原型がある。その原型の人たちがあまりにもよく描かれているために、そして僕自身がその人たちのあまりにも近くにいたために、僕はこの小説を客観的に読むことができない。 藤木に対する福永の一方的な愛は作品の汐見のそれよりもいっそう激情的で、従ってその愛が拒まれた苦悩は一層深く、またその一方的激情的愛の受容を要求された藤木の困惑と苦悩は作品に描かれているよりもはるかに深かった。福永は苦しみぬき、そのことによって藤木もまた一層苦悩を強いられた。

5. 文芸関連雑誌・大学紀要他

No.	タイトル	著者	資料	初出年	ﾍﾟｰｼﾞ数	要旨
1	福永武彦論 ー「草の花」の意味ー	首藤基澄	「国語国文学研究」 7	1972	11	（要点） ・「風土」では男女が結ばれることによって生じた「愛の不可能性」が追求されていたが、「草の花」では純潔を貫くことによって生じた「愛の不可能性」が追求されている。 ・「草の花」においては、プラトニスムが「英雄の孤独」を誘発し、それがプラトニックな恋愛を裏打ちしている。福永は「狭き門」のキリスト教的自己犠牲に代わるものとして、「英雄の孤独」を考えたが、これも「真の愛を生み出す」ものではなかった。 ・福永は孤独を自立の拠点としたために真の愛を育てることができなかった汐見の限界を照射しながら、しかも、そのようにしか生きられなかった戦時下の青春を愛惜し、その意義を可能な限り掘り起こそうとしている。 ・汐見は現実的には無力な孤独を拠点として主体の確立をはかりながら、戦時下のキリスト教や軍国主義にプロテストしており、「草の花」は消極的ではあるが抵抗文学と呼んでいい内容を獲得している。 ・戦後の汐見は、ほとんど完全に精神の自由を獲得している。言葉を換えれば、現実の一切にとらわれないニヒリストになっている。そうした汐見の自我は、愛をも断念することによって確立されたものである。「風土」の言葉でいえば、「死者の眼」で生きているということになる。 ・「草の花」は、「病者の心」という極限状況を生きねばならなかった福永の内面の一つの反照であり、「英雄の孤独」とは引き裂かれた生のうめきにほかならなかった。戦後の汐見は病者としては第三段階に達しており、その内面には「深い深淵」が横たわっているわけだが、福永はそれを推理小説風に、しかも「抒情的に美しく」書いている。（第三段階：自己の内部に、常に明らかに傷痕を直視して生きることである。劇的に、危機の意識に於て、生きることである。／「病者の心」より）

2	作品論　草の花	熊坂敦子	「国文学」 17-14	1972	5	（引用） 「私」は汐見を見る人として登場しながら汐見の死後、遺されたノートを千枝子に託すことによって、使者としても存在する。見る人であり、使者ともなり得る「私」を設定したことは、主人公が見られる人として忖度され、推測される視角が与えられたことであり、人生の奥ゆきを表出することに働きかけたことはいうまでもない。子の構成について、夏目漱石の「彼岸過迄」や「行人」の先例が念頭にあったことを。後の作品「忘却の河」の「あとがき」で記している。各章が独立した短篇である点で、漱石の後期の作品の短編をつなぎ合わせて展開する試みに通じるものがある。「私」の使者的役割を重視すれば、「行人」の二部に通じるし、汐見のノートを遺書と考えれば、大分異なっているが、漱石の「こゝろ」の作品の構成を想起できないことはない。 あまりに孤独なるがゆえに、孤独を逃れようとしてひとを愛することに心急かれる。孤独が愛を渇望するが、愛という連帯意識は孤独と相容れず、そこに矛盾が起こる。福永はその近代的な孤独と愛の矛盾を問題にした。 「冬」はその季節感の象徴するように、愛のない「一つの砂漠」であり、「第一の手帳」はは愛を求めてその渇きに憑かれ、「第二の手」帳は愛があっても孤独である状態である。
3	草の花	水谷昭夫	「解釈と鑑賞」 491	1974	3	（引用） 「草の花」を、森鴎外の「青年」と「灰塵」に比較して、「『灰塵』に賭けた鴎外の＜野心＞を吸い取り、それを独自の形で止揚し、自己の＜野心＞の糧とした」だとした推測されるのは重松康雄氏である。 熊坂氏のすぐれた「草の花」論は、使者として存在する「私」の設定が、漱石の「彼岸過迄」「行人」のものであろうことを論証している。 かかるかたちを要請するものの中心にあるものは、人間の運命的な悲劇や孤独、つまり「死」とその影を深く宿す「愛」の視座であろう。そこで見わたせる主題の響きが、あまりにも漱石の主題に通じるのであって、かたちの類似は結果論であろう。
4	「草の花」の一原型 ー「かにかくに」の意味ー	菅みどり	「藤女子大学園文学雑誌」 18	1975	11	「草の花」の原型「慰霊歌」の原型「かにかくに」（」1936年「一高校友会雑誌に発表）本文の引用が論考の大部を占め、その紹介が主。 汐見の藤木に対する愛にはphysiqueな要素は含まれていないとするが、「かにかくに」においては、永田の藤木に対する気持ちはもっと生々しく同性愛という言葉を用いても良いと思われる、としている。
5	失われた青春「草の花」	大久保典夫	「国文学」 24-5	1979	1	小説の梗概を紹介している。
6	共同討議 福永武彦の作品を読む 「草の花」	菅野昭正 首藤基澄 柘植光彦 中島国彦	「国文学」 25-9	1980	7	（引用） 菅野：　落とした手記とか、失われた手記を偶然誰かが見つけるという構成―たとえば「アドルフ」のような小説がありますね。そういう設定をすることによって人物の内面の奥の方の、他人にはあまり見えない隠された襞まで見通せる、書き込めるというところからくるんでしょうね。 首藤：　福永もジイドが、プロテスタンティスムの誤った純潔主義を批判するという立場から、「狭き門」を書いているというふうに捉えているんですね。ですから、そういう点から「草の花」を見ていくと、「英雄の孤独」というものを、一方で福永は支持しながら、一方では批判する立場をとっている。そういういわば両刃の剣ともいうべき「英雄の孤独」の表現がおもしろい。 中島：「孤独」「愛」というテーマが出てきて、それが一つのイデーとしてこの小説の中でずっと流れていくのですが、作品世界が「孤独」「愛」という言葉になかなか行きつかないというか、イデーを志向するのがまた一つのイデーみたいなことになってしまって、空回りをしている気がします。

7	「草の花」 ーその内的世界と構成を中心にしてー	矢野昌邦	「論及」(論及の会)3	1982	13	(引用) 「草の花」の特異性は、その「内的世界」の内実にある。私見によれば、孤独から「英雄の孤独」への過程と、それに密接あるいは融合した二つの愛(藤木忍への愛と千枝子への愛)における苦悶とその喪失に、その特質の主眼がある。 「草の花」は、作者の創作意図を勘案し尊重するならば、その主人公を中心とした魂はもっと重層的に多角的に描かれるべきであった。(中略) 複数の視点は設定されてはいるが、魂の重層性の抽出は必ずしも留意されていない。青春の描出が魂を中心になされ、しかもそれが三時期において相当の変貌をしているかぎり、しかも戦後の汐見の魂はそれ以前とは大きく隔たっているため、その書き込みがもっとなされるべきではなかったと思われる。「草の花」の発表後、福永は「もう一度陣形を立て直」す心要を感じているが、この内省は大きくわけて二つあると推定される。一つは小説の構成・造型(とくに視点の交錯と時間の交錯)といういわば方法的な面であり、他方は小説の内実(つまり創作意図ないしは主題)である。
8	「草の花」の誕生	畑有三	「解釈と鑑賞」 47-10	1982	7	(要約) ・「かにかくに」の要約を示し、田山花袋「蒲団」との類似を考察している。: いずれも今は過去となった情熱の対象との交歓の思い出と、その失われた嘆きをかみしめている主人公の抽出から始まり、対象をめぐる回想が作品の軸になってくる。恋人に去られた男の悲嘆ということにおいても共通している。文体における近似性もあるとしている。 ・語り手の＜私＞の心を捉えた汐見の＜精神の剛毅＞は、青春の日以後の時間を生きた汐見の現実認識の深化を象徴していると見られるが、その汐見にしてなお、＜僕の愛した者たちは何故に僕を去ったのか＞という疑問が解決されていなかった。＜愛するということの謎＞を解くために汐見は二つのノートを書き綴った。そこで浮かび上がってきた過去の自己像の観念的な様態を確認し、汐見は過去の観念的で現実を取り落としていた自分への自己処罰として死を選んだことになる。
9	「草の花」覚書 ー「冬」についてー	西原千博	「稿本近代文学」 8	1985	7	(引用) 汐見がサナトリウムで2冊のノートを書くことは、彼の「失われた青春」を描くことであり、同時に生きることではなかっただろうか。そして、「私」が「冬」を描くことは、同じように「私」の「失われた青春」を描き、かつ生きることが目的ではなかっただろうか。 「冬」という章は、「死」のイメージを背景にして、「精神の剛毅」という語に代表される強さを持つ汐見、サナトリウムの生活、そして「私」と、様々なモチーフが組み合わされて、まさに「額縁」以上の章となっているのである。
10	「草の花」の成立 ー「風土」との接点を中心にー	津嶋高徳	「山口国文」 10	1987	12	(要点) 「風土」との対比として以下などを挙げている。 ・汐見には、閉ざされたどたん場での、己の生の検証があり凝視があるが、桂にそれは無く、ただ立ち尽くすか、死への傾斜があるばかりである。その意味で汐見は、桂が立ちどまった地点から、残された生を引き継ぐ人物とみることもできる。 ・桂が「孤独に生きること」が「間違いだった」といい、「人を愛するということがみんな空しいことだった」という虚無の空間に封じ込められているのと違い。汐見は、あくまでも「鍛えられて成長してゆく」「孤独」の地点に、あたかも雌伏しているかのように、身を置いている。 ・戦争批判について、桂は、どこか批評家風だが、汐見にはよほど差し迫った切実さがある。 そのほか、漱石の「こころ」との対比、エピグラムについてのコメントも加えられている。
11	「草の花」＜福永武彦＞	首藤基澄	「解釈と鑑賞」 54-6	1989	4	同著者による「福永武彦・魂の音楽」第2部・第3章　愛の不可能性 —「草の花」— の要約と考えられる。
12	「草の花」論 ー「語り」の手法をめぐってー	宮島公夫	「イミタチオ」 15	1990	12	(要点) ・「語り」の仕組み: 「語る私(僕)」と、「語られる私(僕)」により成立し、その複雑に役割分担された「私(僕)」を巧みに操作して語りの世界を形成している。こうした語りの世界を成立せしめている大きな要因の一つが手記という体裁である。 ・「草の花」における汐見の形象化をめぐる問題点: 現在の汐見が知っている点にもかかわらず手記のなかで言及していないキリスト教信仰と戦争体験とがある。 ・成立過程に関して: 福永はジイドのレシに依存しながら「草の花」を「慰霊歌」から膨らましている。一方でジイドのレシの手法を踏襲し、一人称の語りによる過去の物語を構築しながらも、ジイドのように単線的なものではなく、複線的な仕組みを新たに試みている。 ・「語り」の選択性: 福永は「草の花」で「語る私」と「語られる私」を組み込んだ一人称の語りの手法を採用して、過去の忠実な再現を巧みに行った。しかし、その目的を重視するあまり、語りの内容を選択し、そのために人物理解上の欠落部分を作品内に生ぜしめてしまったとも言える。

13	「伊豆の踊子」と「草の花」 ー川端と福永のライトモチーフー	今村潤子	「尚絅大学研究紀要」 14	1991	22	（要点） 「伊豆の踊子」と「草の花」の共通点として以下を挙げている。 1.作品の舞台　2.それぞれの作品に原型がある。 3.川端の原型は破棄され、「慰霊歌」も目にすることができない。 5.原型にさらに原型があり、発表誌がどちらも一高の「校友会雑誌」である。 6.これらの作品にはモデルがある。いずれも主人公（作者）と相手との係わりが同性愛（少年）、初恋（失恋）など青春期における愛の問題であることも同様である。 川端と福永の係わり: 「風土」の重要なモチーフとして桂の生き方に「死者の眼」があり、「あらゆる芸術の極意は末期の眼である」といった川端。 二作家の創作のモチーフや作風において類似性を指摘できるのは。川端と福永の原体験が似ているからである。それは幼年期の母親体験欠如と最初の恋愛体験（同性愛体験）の破綻（失恋体験）といった原体験の似かよりにあるものであるといえる。
14	福永武彦「草の花」論	細川正義	「日本文芸研究」 43-1	1991	17	（引用） 「風土」との関連で言えば、作者にとって関心の中心は、汐見の死に至るまでの人生の展開の必然性をリアルに形象してくことではなく、「愛している時に僕は生きていた」と汐見が言う、その「愛している時」としてあった過去の生の＜中心＞に遡行していって、そこに生の可能性を尋ね、「風土」の桂が得られなかった生の意義を求めることにあったと言えるのではないだろうか。
15	福永武彦研究 ー「草の花:」成立についての一考察ー	鈴木和子	「緑岡詞林」 15	1991	6	（要点） 福永はなぜ汐見を失敗した芸術家として描いたのか。: 福永が療養所時代に発表した「文学と生」で述べている、「ひとり僕の苦しい生に堪えて行くためにのみ文学があるのではなく、逆に僕の文学があるために人々が人生について何らかの慰めと助言とを得たという風にありたい」という考えは、汐見の＜孤独感を自分に強いることを目的に＞した小説とは相反するものだ。そして、「慰霊歌」もまた藤木の死を＜負い目のようなもの＞に感じていた福永が、＜絶望的であり、ひたすら過去を見詰め、そこに私の生きた痕跡を、或いは生きることの意味を、見出そうと＞するために書いたこととも異なっている。
16	福永武彦とキリスト教 ー「草の花:」論のための序章ー	金戸清高	「九州女学院短期大学学術紀要」 14	1992	8	（引用） この世にあっては一切が時と共に過ぎ、やがて消え去って行く。彼の青春の記憶もまた同じである。彼はそれを主人公汐見の手記として遺そうとした。それも謂わば墓標に過ぎぬものなのかもしれない。しかしこのような中にあって、福永は「永遠」なるもの、「主の御言」と出会った。「草の花」のエピグラムは、このような彼の「永遠」なるものへの憧憬を物語っている。
17	「草の花」論 ー「死」の結晶化と「語り」をめぐってー	松野志保	「繍」 6	1993	15	（要点） 本稿では、「風土」から「草の花」へ、とくに「死」のモチーフがどう結晶化しているのかを視野に入れながら、さらに「草の花」の語りの方法について検討を加えている。 ・桂が「死者の眼」というものを持つことによって、「未来の源」すなわち「死」から現在を顧みて過去の呪縛を断ち切ろうとしたのに対して、汐見は過去しかない人間としての自己を厳しく認識し、思い出しそれを定着することにすべてを懸ける。つまり、桂が過去を捨て去ろうとして過去を直視できず、結局は過去の呪縛を解くことに失敗したのに対し、汐見は書くという行為をとおして積極的に過去に身を投げ入れて過去の意味を再認識することで、いままでの生の意味を問い返そうとする。こうした汐見の認識の深化は、桂と汐見の「死」に臨む姿勢の違いに起因しているのではないか。首藤氏は、汐見は桂の「死者の眼」の体現者でるという指摘をしている。 ・死者は過去の人としてあるのではなく、思い出すこと、語ることで、生者に現在的な意味を持ちうることを汐見は自覚的に示している。
18	福永武彦「草の花」年立考	大森郁之助	「札幌大学女子短期大学部紀要」 25	1995	6	「草の花」本文中の主要事項中、年・月または季節等を特定しうるものを年次別に整理配列するとともに、その折々の関係人物の年令を推算付記して読解に資そうとするもので、主表と考証の二部から成る。
19	「草の花」に描かれた弓道の風景	高野泰宏	「福永武彦研究」 1	1996	2	（引用） 福永は弓道を武道としてではなく、運動部でのスポーツ活動として捉えていたのかもしれない。また福永がphysiqueな要素の説明で用いた、藤木の行射する部分の記述は弓道が持っている美しさの一つではあるが、これはあくまで藤木を描写するための手段として用いられているに過ぎないと思われる。従って福永に弓道に対して何か特別な思い入れがあったとは推測できず、むしろ日本的な美しさの認識に趣が置かれ、弓道はその認識を修飾するための手段として捉えられていたものと考えられる。
20	作品の中の病室風景～ 「風花」と「草の花」と	高野泰宏	「福永武彦研究」 2	1997	2	（要約） 「草の花」第一の手記で描かれる病室の風景は、「死」が強く、むき出しになって表れている。しかし「風花」では「草の花」のような強い「死」の表出はない。二つの作品の「死」の描き方の差は病室風景の描写に顕著に表れている。

21	福永武彦「草の花」論	吉田留美子	「玉藻」 34	1998	8	（引用） 二つの愛に挫折した汐見は、既に永遠なるものを信じられぬ人となっており、自己を支える唯一のものとして「英雄の孤独」を手に入れる。しかし戦争や病の宣告を経て、遂に自身が選び取ったこの孤独までも傷つき、苦しむことになるのである。そのような彼がやっと探し当てた生き方は、過去をノオトに記すという行為であった。そしてその中で汐見が悟ったことは、皮肉にも一切の愛を排除した孤独な生き方が、人間としての真の幸福を破壊するものであったということである。汐見がかつて失った愛こそが、彼の憧れる「生命の充足感」へと導くものだったのだ。
22	福永武彦「草の花」論 第二の手帳より－近代における愛の不毛－	吉田麻生	「鶴見日本文学」 3	1999	10	（要点） 汐見が追求している愛は、東洋的な「仁」や「慈悲」といった要素を含んでいることが否めない。この小説は、アジア的な日本の土壌で、単独に輸入された「愛」に対して、矛盾を感じて真剣に悩んだ青年汐見を描き出すことで、日本とヨーロッパ文化の差異を明らかにし、日本人の精神がこのままでは行き詰るということを暗示しているのではないか。
23	福永武彦「草の花」論 －「第二の手帳」に於ける精神世界の係わりを中心に－	野村智之	「日本文芸研究」 51-3	1999	13	（引用） 「草の花」は、「愛の不可能性」などといった大きな曖昧な枠の問題ではなく、互いに理想の世界のみでしか生きようとする意思を持てなかった人間同士が起こしてしまった悲劇であると言える。コミュニケーションの不成立の根源は単なる「好き嫌い」という平素よく見られる問題なのではなく、自己中心的な架空の理想的観念世界に他者を引き込むことの不可能性を如実に示しているのであり、その在り方を双方が執拗に提出することの無意味性を表していると言うことができるであろう。
24	「草の花」再考 ＜孤独な魂＞が消滅するまで	高野泰宏	「福永武彦研究」 4	1999	11	（引用） 筆者は汐見の行動を小説全体にわたって調べ、孤独から慢性自殺へ移行する気持ちの変化をプロットしてみようと思い立って本文を構築したが、「草の花」には死者の魂に影響を受ける場面と自分が死者になって他者に影響を与える場面の両者が見事に融合して描かれており、こうした「他者の死」という側面から眺めると完成度の高い作品であると言える。
25	「草の花」校異（一）	井手香里	「福永武彦研究」 5	2000	8	「冬」の章について、初版（S29.4.15）、文庫18刷改版(S42.12.10)、決定版(S47.3.10)、全集版(S62.5.20)の校異表をまとめている。
26	「草の花」注釈1「冬」	鈴木和子 濱崎昌弘	「福永武彦研究」 6	2001	14	福永武彦研究会例会において1年間をかけて行われた「『草の花』を読む」の為に作成された資料に加筆・訂正を施したもの。 掲載語句の例： 寿康館、K村、外気小舎、ストレプトマイシン、喀痰検査、カストリ雑誌、国立東京療養所の地図など
27	「草の花」校異（二）	井手香里	「福永武彦研究」 7	2003	6	「第一の手帳」の章について、初版（S29.4.15）、文庫18刷改版(S42.12.10)、決定版(S47.3.10)、全集版(S62.5.20)の校異表をまとめている。
28	「草の花」にみる＜孤独＞ －「こゝろ」の受容を越えて	鳥居真知子	「福永武彦研究」 7	2003	13	（引用） 福永は、自己の体験を生かしつつ、人生の最後の「主体的」な「行為」として書いた遺書的なノートを、作品に導入することを構想したのである。その手法は、40年前に漱石が「こゝろ」で試みたものと通底する。 しかしながら福永は、「こゝろ」における「先生」とKの両者の「孤独」の問題を汐見に投影させつつ、遺書的なるものを通して、福永独自の＜孤独＞の問題の追及を試みる。つまり福永は漱石とは異なり、あえてその遺されたノートが「他人」に受容され得ない結末を「選択」するのである。そこには、「生者」と「死者」との媒体をも断った人間の「氷のような孤独」が表出されている。 漱石が「こゝろ」を通して追求した人間の＜孤独＞の問題は、サルトルの「実存主義」哲学を踏まえつつ、より救いのない究極的な人間の＜孤独＞の問題として、40年後に福永の「草の花」によって提示されたのである。

29	「夢の輪」と「心の中を流れる河」の間 ー福永武彦のキリスト教意識についての一考察ー	近藤圭一	「聖徳大学研究紀要（人文学部）」 16	2005	14	（引用） 「神を捨て」ながら「孤独な信仰」を持ち続けている汐見の「生」の本質に対してはキリスト教は何の関係もないのである。なぜなら、汐見は孤独で、しかもその「孤独も無力かもしれないが」、神の意思に従っていると考えるよりは「百倍」も正直で人間らしい」と考えているからで、その思惟はとうとう「神がいないからこそ、僕は人間らしく苦しむことが出来るのだ。愛することも、苦しむことも、神とは関係がない」と言い放つ地点にまで進む。 「夢の輪」は、「独身者」から「草の花」、そして「心の中を流れる河」まで、姿を次第に変えながら続いてきた、神と対話する人間を描こうとするのではなく、単なる人だけの世界を描こうとしたのである。そのためにキリスト教意識を引きずってきた「心の中を流れる河」は抹殺されなければならなかった。それは、神との距離で苦しんできた福永にある結論をもたらした。彼の文学には以後この種の神学論争が見られなくなったのである。
30	作為された孤独 ー福永武彦「草の花」論	西田一豊	「日本近代文学と宗教」 120	2005	11	（要点） ・「かにかくに」と他の作家の小説との関連　〇志賀直哉「濁った頭」: ①文中に″濁った頭″の語句 ②旅先の同伴者への殺意 ③性欲の圧迫 ④父子の葛藤と継母の存在　〇漱石「こゝろ」: ①辻が「先生」、永田が「K」の役回りを演じている。 ②永田の最後は「K」の最後と重なる。「こゝろ」は小説の枠構成、遺書の形で「手帳」が「私」に託されている点など「草の花」に至るまでその影響が残っている。 ・「濁った頭」と 「こゝろ」との関連は、「草の花」の私小説的な読み方を相対化する働きがある。 ・汐見（福永）の主張する「本当の無教会主義」は矢内原忠雄の「無協会信仰の根本」と合致するが、「徹底した個人主義」にだけ留まろうとする汐見に欠けているのは、矢内原に従えば「寛容の徳」だったということになる。と同時に福永の無教会への関心が逸するのもこの地点であることは間違いない。つまり福永は個人主義的という点において無教会に賛同しながらも、あくまでも個の信仰にこだわり続けるのである。 ・汐見の「孤独」が「一種の倫理観」であり「神」に対置されうるものである以上、無教会主義の個人的信仰とは全く異なることは言うまでもない。 ・「英雄の孤独」とは「無益な孤独」を脚色したものであり他者を回避し続ける自己の装飾されたニヒリズム的状態にすぎない。 ・病の発覚以後の汐見の行動（自殺未遂、キリスト教入信）を見ると、そこには「孤独」を拠り所とした主体性はなく、「手帳」を通じて、汐見の関心は既に現在にはなく過去に向かっており、「手帳」を執筆しながら決定的に「孤独」を失い、さらにそれを嫌悪したと考えられる。 ・自ら積極的な自殺する主体もなく、また嫌悪する「自我」と持続的に付き合っていくことも選ばない汐見が望んだものこそ手術中に不意に死ぬこと、あるいは蘇生することの偶然に身を委ねることだったのではないだろうか。
31	福永武彦「草の花」論 ー「記憶」の中の死者の「生命」ー	小林翔子	「龍谷大学大学院文学研究科紀要」 29	2007	11	（引用） 「草の花」は男性主体主義を軸に、「久遠の女性」に憧憬する男性を描いた作品であり、同時に「久遠の女性」に祀り上げられた「普通の女性」を描いた作品でもあった。 本稿では、汐見の「愛」の対象となったのが、硬派的関係における稚児としての藤木忍と、「久遠の女性」信仰の依代としての千枝子であることに注目した。いわゆる稚児にも、「久遠の女性」にも、男性（＝汐見）を主体とした際には、その関係にある種の権力性を見てとることができる。しかも汐見の場合、「愛」の対象となった内面を理解しようとさえしていない。こうした志向性に無自覚であるかぎり、「僕の愛した者たちは何故に僕を去ったか」という疑問に、汐見が答えを見出すことはおそらくない。汐見の意識は「私」に受け継がれ、また読者の多くにも共有されてきた。いいかえるなら、「草の花」は従来、汐見視点にのっとり男性主体の立場から読解されてきた作品だった。だが客体として捉えられてきた藤木兄妹の視点にあらためて立てば、作品は別の面を見せる。とくに千枝子の立場からすると、「草の花」は、作者の意図に反し、女性が主体を獲得しようとして挫折した物語として読むことができる。
32	「慰霊歌」から「草の花」へ（その一） ー「第一の手帳」への改稿を中心にー	宮嶌公夫	「イミタチオ」 46	2007	13	（要点） 「慰霊歌」第一章が「第一の手帳」への改稿するに際しての重要な案件として以下を挙げている。 ・主要因は、作品が四章構成へとふくらまされたという構造上の問題。 ・作者と「僕」との距離を再設定し、作品から作者の影を払拭すること。 ・「第一の手帳」には過去を対象化し、それに向き合っていこうとする、より積極的な姿勢が付与されている。

33	福永武彦とキリスト教	西田一豊	「解釈と鑑賞」 74-4 935	2009	6	（引用） 作家として出発する以前の福永と、最後の長編小説となった「死の島」を書き終えたのち信仰を得た晩年の福永の傍らには常にキリスト教が存在したことは明白である。しかし翻ってその間に描かれた福永のテクスト群にキリスト教の影響が見られるかというと、その判断には躊躇せざるを得ない。 「独身者」や「草の花」ではキリスト教やその信仰については批判的に描かれており、個に根ざした「倫理観」である「孤独」の可能性そのものに、キリスト教を超えた超越性が求められているのである。 「草の花」でのネガティブな関心のあり方から、晩年の「静かな回心」を果たす福永はどのように繋がっているのだろうか。この問題を考えるには、テクストの中のキリスト信仰への徴を読み取ろうとするよりも、キリスト教者であった母をめぐる問題系から接近するほうがよいように思われる。つまり「幼年」で亡き母親の記憶を描く前後から、福永のテクストにしばしば出て来るようになる「妣」や「古里」といった言葉に表される母体回帰への志向が、福永個人のキリスト教への回心を容易ならしめたと考えられるのではないだろうか。（中略） 晩年の作者の回心へ至る何かがそれまでのテクストにあるとするならば、それは「母」をめぐる主題系においてほかないと思われるのである。
34	「慰霊歌」から「草の花」へ（その二） ー「第一の手帳」への改稿を中心にー	宮嶌公夫	「イミタチオ」 48	2009	12	（要点） 「慰霊歌」第三章が「第一の手帳」へどのように改稿されているかを前稿同様に検討を加えている。 ・一章同様、作品構造上の要請。 ・一章同様、「病者」といった一般的な主体を全面的に削除し「僕」の物語として統一された。
35	福永武彦「草の花」論 ー愛の不可能性と魂の救済ー	高松麻美	「筑紫語文」 19	2010	18	藤木忍、千枝子の人物像、「かにかくに」・「慰霊歌」との比較、福永と母、Arcaidiaについて考察している。 （引用） 忍も千枝子も、現実の存在以上に美化され、汐見の理想の中で育まれていった人物であることを見てきた。だからこそ愛が実らなかったのだが、その汐見の理想像とはどこから来たものであったのかといえば、亡くなった母に由来するものであった。（中略） 福永は忍の最期に母の名を呼ばせるという救いを与えたが、この世に魂の救済がない汐見にも Arcadiaへ旅立たせるという救いを与えた。
36	福永武彦とジュリアン・グリーンにおける不可能な愛の主題（二）	井上三朗	「山口大学文学会誌」 61	2011	23	グリーンの「アドリエンヌ・ムジュラ」「幻を追う人」「モイラ」と福永の「風土」「草の花」「海市」の影響関係を考察している。 （引用） づリーンの場合、愛の不可能性の原因は、「アドリエンヌ・ムジュラ」のヒロインの愛のように、それが夢想の中の愛であること、そして「幻を追う人」「モイラ」の主人公のように、作中人物が純粋志向を持つという点に存する。同じように福永の小説も均一に、夢想の中の愛を扱っており、純粋志向は「草の花」において目に留まる。 作中人物たちの孤児性、愛の障害の設定、人物たちの愛のありようという点において、グリーンと福永との間には影響関係が認められる。 福永はグリーンの読書から、不可能な愛という文学主題を追求することのうながしを受けるとともに、この主題によって作品世界を構築することを学んだのだと結論しうる。
37	「草の花」の成立を巡る一試論	近藤圭一	「年報　福永武彦の世界」 4	2017	11	（要点） ・「夢の輪」執筆のためのノートにある「汐見茂思」は、「愛と現実」という小説を書き、入院し手術を受け、恢復して小説への決意をさらに固めるという人物像になっている。 ・「草の花」構想の過程で、冗漫な「慰霊歌」を書き直し、「夢の輪」から汐見を移行させたと思われる。 ・「第二の手帳」で汐見が書こうとする小説は「独身者」の「愛と死と運命を歌ふ」を下敷きにしたものだろう。 ・「独身者」も「夢の輪」も結果としては未完に終わったが、他の作品に転用され再生された。その一つが「草の花」であった。